

感情を揺さぶる

「自分の感情を確かめる」 4月27日に開催した『見えないものを言葉にする』と題した講演会の講師、スポーツライターの坂口功将さんがおっしゃった序章部分の言葉です。坂口さんは、母校の体育会ラグビー部の専属記者兼カメラマンを務め“取材して伝える”この虜になり、卒業後に日本文化出版社にて記者兼カメラマンとしてスポーツと選手を取材、2024年に独立してフリーのスポーツライターとなりました。現在はバレーボール界の取材を中心に記事を書いています。選手のプレーや生き様を取材し写真に撮ったうえで記事にするのですから、“見えないものを言葉にする”講演の冒頭には、取材相手の事、その上で選手の背景や考えをどのようにまとめるか



というような話を中心に進むであろう予測を立てておりました。ところが取材相手ではなく自分の内側を見つめることからのスタート。生徒に「自分の好きなことやものをイメージして。」と問いかけます。その内容を発表してくれるという生徒を指名し、インタビューが始まります。生徒の「本を読むことが好きです」の回答に、「いつから好きだった」「どういうところが好き」「気に入っているシーンは」・・・と次々に質問を投げます。坂口さんは「好きなことを話している人の表情を見るのが好き。」とご自身の感情を確かめました。その上で「その人の好きなことを取材し、言葉に表現したい。」と考えているそうです。嫌いなことは継続しません。好きなことは、妨害が入ろうとも継続します。だから「好きという部分を言葉にする」のです。人に伝えるために言葉にすることは、容易ではありません。生徒たちは1年間かけてその力を高めていくのですから、“好き”と思える事柄を言葉にしていくことが“伝える力”向上への一歩であると確信しました。



その“好き”という感情は講演の中で“心揺さぶられる”という言葉に変換されていきます。選手のプレーに、背景に、発言などの目の前の現象に対して、感動し、気になり、疑問を感じ、どんな形であれ、感情が揺れ動いた時が“心揺さぶられた”時なのだ理解できました。何かを伝えようとしたときに、「どうしていいかわからない」と漠然としてしまった経験はどなたもおもちでしょう。伝える内容や情報を絞るには、“心揺さぶられた”部分に着目するのです。



講演は、伝えることから聴くこと・受け止めることへと章を移します。相手に「この人に話したい」と思わせる姿勢を作ることが重要と説きます。言われてみれば先ほどの生徒へのインタビューにその形が表現されていました。坂口さんは生徒をしっかり見て問いかけつつ、回答に対して大きくうなずく、共感や驚きを声で表し、感心や納得を表情で表していたのです。更に、矢継ぎ早に出される問いは、インタビュー相手の“好き”をどんどん掘り下げていく工夫がされています。「何故そう思った？」理由をたずね、「どんなイメージ？」言葉にならない部分を拾い、「具体的にはどんな感じ？」鮮明化して、「他には？」と広がりをもたせ・・・。そうやって情報を集めていくのだと知りました。

終盤では、伝えるためのテクニックについても語られました。目を引くタイトルを考える・結論を先に掲げる・オチをしっかりさせる等々。「伝え方に正解は無い。テクニックよりどのような人が受け取るのかイメージして言葉を選ぶことが最も大切。受け取る側の心揺さぶる単語を使おう。」「読んだ人の心が揺さぶられた時に、書いてよかった・伝えられたと感激できる。」と、講演は結びを迎えました。

自分の感情を確かめる。取材相手の感情を引き出す。受け取る側の感情を揺さぶる。受け取る側の感情のゆれは、伝え手である自分に還元される。“伝える”とは一方通行ではありません。

自分、取材相手、受け取る側が 環状 になった時、素敵に伝わるのです。